

○本日の庭園

テンメン（テンメンちゃん）の庭園

○議長クイーン

□青藍（玉世）

○参加クイーン

●シャードンフロイデ（グリユネ）

☆超獣ギガ（メアリー）

▼芳（薫）

◇比良坂八十八（コーネリア）

△オフェリア（キヤロライン）

≪ベルジャネーナちゃん

雅庭会のマトリョーシカ

女王様気質なテンメンちゃん

（白いテーブルクロスが引かれた食卓机に、各地から集まったクイーン達が座っている。クイーン達は、めいめい自由に喋っていたが、議長である玉世が席に着くと、皆黙り、食卓は静まり返った）

□「……さて、皆様。本日も『クイーン雅庭会』へお集まりいただき、ありがとうございます。本日の議長はわたし、青藍が務めさせていただきます。よろしくお願います」

（まばらな拍手）

□「本日の庭園は、テンメンの庭園。彼女は、喜ばしき新参クイーンであり、作庭も今回が初めてです。新参クイーンの瑞々しい感性で、我々に新しい風を吹き込んで

くれることでしょう。

では皆様、忌憚のないご意見をどうぞ」

（すぐに一人のクイーンが手を挙げる。二つ縛りをして、魔法少女のような服を着た女の子だ）

☆「はい！」

□「はい、どうぞ」

☆「ぼくの目に適ったよ。とりあえずね、花がみんなかわいい！ 愛されてお世話されてるんだな〜つてのが伝わってきて、ニコニコしながら歩けた！

あ、でも不満なのは、動物がいなかったこと！ やっぱり動く子はいった方が楽しいと思う！ 猫とかどう？ 最初にあつた丸いやつに乗ってたらかわいくない？

そーいや何だろアレ。地球？

ま、いいや。誰を住ませたらいいのかわかんなかったら、ぼくが見繕ってあげるから、一度ぼくの庭園においでよ。猫以外にもテンメンが気に入る動物がいるかもしれない」

▼「出た、動物マニア」

（一同、笑う）

☆「あ、おわりです」

（若干の静寂。その後、一人のクイーンが手を挙げる。髪がとても長く、真っ黒なゴシックドレスを着ている少女だ）

●「……いいですか？」

□「はい、どうぞ」

●「私の目に適いました。いえ、この『私の目に適いました』という挨拶そのものにも私は疑義を呈したいのですが。いえ、それはいいです。」

あの庭園、少し小さすぎませんか？ あれでは庭園というより、庭と言うのが適切です。いえ、私はあれぐらの庭も好きですが。

新参クイーンだから作庭が難しいのは分かるのですが、この規模の庭で、表現しなかったテーマが全て表せたのか、疑問です。これは後で答えてくれますか？

それと、動線も気になります。細かい点ですが、三叉路が二回続く箇所があります。花と彫刻を種類でゾーン分けした弊害だと思うのですが、少し足が運びにくいと思います。まあ、私の好みの問題なのですが。

あ、好きな所。そうですね、庭木の剪定は丁寧だと思います。まあまだ甘い所はあるのですが、そこは、新参クイーンにしては、ということ。良い庭でした」

□「ありがとうございます。では、次の方」

(すでに一人のクイーンが手を挙げている。深紅のドレスを着た、背の高い貴婦人だ)

△「では、わたくしが」

□「はい、どうぞ」

(クイーンは一度咳払いをして始める)

△「わたくしの目に適いましたわ。……まず庭園に入っ
て最初に眼に入るのは、あのとでも大きな繭の彫像。」

……わたくしは、あれを見たときに思いました。これはとんでもないクイーンが現れましたわ、と。

やはり庭園といえは、絢爛豪華であるべきでしょうか？ その点、あの彫像は見事でしたわ。とても壮麗で、『これから凄惨な庭園を造ってやるぞ』という意気に満ちていました。

それでいて、ほかの彫像、たとえば男女の像や時計台の像などには見慣れない造りも多く、新参クイーンの果たすべき役割をきちんと理解していました。会に貢献する模範的なクイーンで、わたくしは嬉しい限りですわ。

確かに、規模は小さすぎますし、花だって地を這うような地味なものが多かったですけど、それは新参クイーンゆえというもの。わたくしもこんな頃があったのかしらと、むしろ可愛げさえ覚えたものですわ。

わたくしはこの会で最も長く、庭園を三百年続けていますから、もしわたくしの庭園に来てくだされば、作庭を手取り足取り教えてさしあげますわよ？

そうだ、庭園自慢のハイブリッドテイも振る舞ってさしあげますわ。それがいいでしょうね。
終わりですわ」

□「……ありがとうございます。次の方はいらつしやいますか？」

(一人のクイーンが手を挙げる。ショートカットの、学生のようなセーラー服を着た女性だ。気安い様子で手を挙げながら、涼しげな笑みを浮かべている)

▼「じゃあ、わたしいい？」

□「はい、どうぞ」

▼「はい。……テンメン、きみ天才？」

(一同、笑う)

▼「とりあえず、一番目立つのは、初めにある繭の彫像だよ。ってことは、アレが庭のテーマなんだと思う。

その後に植えられている花達だけども、あれ、ぜんぶ近寄る蝶が違ふ花だよ。それも、わざわざ分かれ道でブロック分けしてる。……つまりさ、あの庭園は、初めの大きな繭から、それぞれ違う姿に成長していく蝶達を見せる、いわば蝶を見る為の庭園だということじゃない？

庭園の規模が小さいみたいな話があるけど、わたしはあれも一つの表現意図だと思うよ。あんまり庭園が広いと、蝶が色々な所に飛んでっちゃうでしょ？ あえて庭を狭くして花の密度を高めることで、いっぱい蝶が飛んでるところを見せるような仕掛けになってるんじゃないかな。

虫を見せる庭園ってのはこれまで無かった発想だし、グリーナーが言ったみたいに、剪定も丁寧だった。なかなか期待の新参クイーンなんじゃない？
これからの庭に期待してる。

……あ、わたしの目に適いました」

(一同、笑う)

▼「終わりです」

□「はい、ありがとうございます。では、次の方」

(静寂)

□「いらつしやいませんか？」

(一人のクイーンがおずおずと手を挙げる。髪をポニーテールにまとめて、女騎士然とした甲冑を着た女性だ)

◇「……ああいう庭園は私の得意分野ではないのだが」

□「はい、どうぞ」

◇「私の目に適った。」

……まず、剪定が非常に見事だった。特に、足元の葉までまったく同じ気の使いようで切るといえるのは、尋常な事ではない。

そっだな……それと、土。足元に土を使うと、造園後すぐは地面が踏み固められておらず、歩きにくくなることがあるが、あの庭園はそれが無かった。入念な慣らしが感じられて、好印象だった。

……いや、これはいい。以上だ」

□「はい、ありがとうございます。……他に」意見を見ただけの方はいらっしやいますか？」

(誰も手を挙げる。玉世は人形のような表情で食卓を見回すと、最後にテンメンに顔を向けた)

□「では、最後にテンメンさん。コメントをどうぞ」

(テンメンがコメントする)

□「では、この後のクイーン・飲み会に参加する者は挙手してください」

●(行きますか?)

☆(行く行く。お腹すいたー)

△「先月のメイン……なんでしたっけ？」

▼「イカ？」

△「そう、それ。また出るのかしら」

△「もしそうなら庶民的ってレベルじゃねーな」

(一同、手を挙げる)

□「……はい。では、本日の雅庭会はこれにて終了とします。クイーンの皆様、忌憚のないご意見、ありがとうございました」

(一同、拍手。クイーン達はめいめい立ち上がって、好きに喋ったり一人で考え込んだりしながら、両開きの扉から出て行った)

END

○本日の作品

□青藍（玉世）の作品『女王達の批評会』

○議長クイーン

※ベルジャネーナちゃん

○参加クイーン

●シャーデンフロイデ（グリユーネ）

☆超獣ギガ（メアリー）

△オフェリア（キャロライン）

▼芳（薫）

◇比良坂八十八（コーネリア）

*テンメン（テンメンちゃん）

（イカ料理が並べられた円卓に、客であるクイーン達が座っている。クイーン達はそれぞれ、青藍から渡された3枚の紙を読んでいる）

※「あー……いいか？ 始めるぞ」

（議長のベルジャネーナが頭を掻いて、円卓を見回しながら言った。だぼだぼのジャージを着た、半眼の女性だ）

●「……どうぞ」(まだ紙を読んでいる)

▼「オッケー」(紙から顔を上げないで言う)

△「言わずとも始めればいいのではなくて？」

※（この空気……冷えてるってレベルじゃねーな！）

（ベルジャネーナは心の内で自らを鼓舞すると、円卓に向けて口を開いた）

※「……えー、本日は『クイーン・飲み会』へお集まりいただきありがとうございます。雅庭会の終了後に、急遽、青藍から小説作品の提出があったため、この場を使って、臨時で小説の批評会を行おうと思います。議長はわたくし、ベルジャネーナが務めさせていただきます。よろしくお願いします」

（まばらな拍手）

△「議長はクイーンネームを名乗るのが習わしですけれど」

※「……わたくしは庭園を作っておりませんので」

△「ハッ、そうでしたわね？」

※「ぶっ殺してえ……本日の小説は青藍の『女王達の批評会』。雅庭会の面々をまねたと思われるキャラクター『女王』が、架空の小説についての批評会を行う小説です。」

では皆様——」

●「あの、議長が小説の内容を説明してしまうのはどうなんでしょうか。議長の中立性が失われませんか」

※「……じゃあお前が議長やりますか？」

●「いえ、すみません。気になっただけです」

※「（じゃあ言うなよ）……では皆様、忌憚のないご意見をどうぞ」

（すぐに一人のクイーンが手を挙げる。深紅のドレスを着た、背の高い貴婦人だ）

△「読ませていただきましたわ。」

はつきり申し上げて、不快でしたわね。これ、何がしたいんですの？ 自分は冷静に会を観察出来ている、とても言いたいのかしら？

それで言うなら、まあ、この黒い正方形の『ジュリア』がわたくしかしらね？ まったく似せていませんけれども。

（もう一度紙をよく読む）……ハッ、よくまあ、人をこんな悪しざまに書けたものですわね？ その能面のような顔の裏で、いつもこんなふうになを観察していたのかと思うと、かえって尊敬さえ覚えますわ。

地の文はカッコ書き、ページ数は少ない、展開は平板に極まり、おまけにオリジナルですらない。少しは小説としての体裁を整えてから出したらどうかしら？

この稚拙な小説モドキの事は忘れてあげますから、もう少し腕を磨いてから、もう一度書くのはいかがかしらもう少し皮肉が上手ければ、私だってきちんと読んでさしあげますわよ？

終わりですわ」

（死んだような静寂。ベルジャネーナがげんなりした顔で肩を降ろし、芳が息を殺して笑っている）

●「……こういったものは初めてなのですが」

（紙に眼を落としながら、一人のクイーンが手を挙げた。髪がとても長く、真っ黒なゴシックドレスを着た少女だ。手を挙げた後になって、ようやく円卓の様子に気付いた）

●「え、なんですか？」(きよろきよろ)

▼(めちやめちや笑うのを我慢している)

※「いや、なんでもねーよ。どうぞ」

●「あ、はい。読ませていただきました。……この場合はこの挨拶でいいですね。読ませていただきました。」

そうですね、ベルジャネーナさんの言っていた通り、これは雅庭会をモデルにした小説で間違いないでしょう。人数もちょうど七人ですし……いえ、テンメンさんを入れたら八人なのですが。新参クイーンだから、登場してないのでしょうか。

地の文には齟齬が見当たりませんし、女王達の描写もなかなか上手いですね。特に、ほぼセリフ一つでキャラクターを立てているのは、新しい試みだと思います。

……私がモデルになっているのは、この『ペロウソフ』さんでしょうか。確かに、こういった理論立てた話し方をしますし……まあ、こういう棘のある言い方も自覚しています。全て一緒、という訳でもないのですが。

これで自己を顧みるようになるかという点、少し疑問ではありますが、なかなか面白い小説だと思います。

終わりです」

※(ナイス、グリユーネ！……ありがとございませした。えー、では、次の方はいらつしやいますか」

(若干の静寂の後、一人のクイーンが手を挙げる。二つ縛りをして、魔法少女のような服を着た女の子だ)

☆「はい」

※「はい、どうぞ(行け、メアリー！)」

☆「読んだよ。……う〜ん。ぼくこういうの苦手なんだよね。もつとヒーローとかいるやつ？」の方が読

みたいかも。あんまり分かんなかったかなあ。

あ！でもこれ！このハートマークの『魍魎珍味』ちゃん！この子はなんかかわいいかな。動物を食べるっていうのも、確かにアリだね！あ、もしかしてこの子ぼく？動物だし！

そう思うと、ほかの子達も、みんなつぼくて楽しいかも？ん〜でも別に、違う気もするしなあ。ホントにこれ、ぼくたちがモデル？ん〜

わかんない！おわり！

※(こいつは変わんねーな)……はい。ありがとうございました。では、次の方」

(一人のクイーンが手を挙げる。ショートカットの、学生のようなセーラー服を着た女性だ。気安い様子で手を挙げながら、涼しげな笑みを浮かべている)

▼「じゃ、わたし行こうかな」

※「はい、どうぞ(さて、どう出るかな……)」

▼「読ませていただきました。いや、これはいいね。わたし好きだよ、こういうの。」

モデルがいるか否か？って話があるけど、わたしはいいと思うな。

例えば『ペロウソフ』だけど、この子がグリユーネにぴったり、って訳でもないでしょ？メアリーが言ったみたいに、誰かモデルがいるっていうよりも、ちよつとした『あるある』を書いた小説なんじゃないかな？なにか思う所があるから、読んで刺さるっていうか。

一つ、この小説の特徴的なところを挙げるとすれば、この小説からは作者の意見が見えない、ってことだね。雅庭会の『あるある』を書いてはいるけど、それが良い

ものか悪いものか、作者自身の立場を明確にしないままに作品を終える。これは、なんでなんだろうね？

わたしが考えられるのは、二つかな。一つは、善悪の判断を保留することで、作者の意見が介在しない、それこそ『あるある小説』の域に留めたかった。雅庭会をモデルに書いたけど、別に雅庭会になにか不満がある訳じゃない、ってことかな。

もしくは、まあ、これはあんまり良い可能性じゃないけど、批判を避けた。本当は雅庭会に、なにか不満があるんだけど、それを書いちゃうと角が立つから、『あるある小説』の域に、あえて留めておいた。

もし後者なら、わたしはちよつと面白いね。あの玉世の感情がちよつと見えた、ってことだからさ。

だからわたしとしては、その不満をもつと聞いてみたんだよ。

……あ、これは絶対に後で答えてくれる？」

△「フツ」(鼻で笑う)

(地獄のような静寂。ベルジャネーナが再びげんなりする。超獣ギガは、あまり理解していない様子で円卓を見回している)

▼「んー、わたしが個人的に共感するのは、この『甘鯛』さんかな？喋り方とかね。あ、終わりです」

※(死んだわ)えー……ありがとございませした。次の方はいらつしやいますか」

(誰も手を挙げない)

※(やつと終わったよ)……いらつしやいませんか。

では本日の——」

△「テンメンはどう思いますの？」

(その言葉に突如、テンメンに視線が集中する)

◇「おい、キャロライン——」

(何か言いかけた比良坂八十八を、芳が手で制する)

▼「まあまあさ、いいんじゃない？ わたしもテンメンの意見を聞いてみたいかな。……どうかな？ 別になんでも、感想を言うだけでいいんだけどさ」

(テンメンが困ったように円卓を見回して、シャーデンフロイデを、助けを求めるように見た。シャーデンフロイデは一瞬うっと詰まったようにのけぞると、しばらく考え込んでから、言った)

●「……まあ、何でも経験することは良いことです」

☆「お？ いいねいいね！ ぼくもテンメンちゃんの感想聞きたいかも！ 青藍も、そつちのが助かるんじゃない？ 感想はあつたほうがいい、みたいなの！」

(クイーン達の視線を受けて、一人の新参クイーンが小さくなりながら手を挙げる。花冠をつけ、水色のワンピースを着た、線の細い少女だ)

※「……はい、どうぞ(すまん)」

*「あ、はい……読ませていただきました。」

えっと……私はあんまり、よく分からなかったです。

雅庭会の様子を小説にしたって言ってましたけど、私、新参クイーンなので、あんまり皆さんの喋り方とか知りませんし……批評もしたことないので、そこもあんまり……」

(地獄のような静寂)

*「えっと、その……すみません……」

※「あーやばいやばいやばい) いや、気にすんな。あー、次の方はいらっしやいますか？」

(誰も手を挙げない)

※「つし！ よーし！) いらっしやいませんね。では本日の——」

◇「待ってくれ。いいだろうか」

(一人のクイーンが手を挙げた。髪をポニーテールにまとめて、女騎士然とした甲冑を着た女性だ)

※「……どうぞ(知るかも)」

(比良坂八十八は指名されると、一度決意するように頷いてから、青藍を睨みつけた)

◇「読ませてもらった。」

……私は、庭園でも小説でも、作者は切っても切り離せないものだ、と考えている。特に、それが現実をモデルにしたものであればあるほど、尚更に、だ。

その点で、玉世……お前に聞きたい。

お前は、この小説を会に出せば、雅庭会にさざなみが起きることなど、とうに予想がついていたはずだ。

そして、提出したタイミング……新参クイーンが現れた、まさにその日だ。お前は、この小説の内容では、新参クイーンが批評しようもないことも、また予想がついていたはずだ」

(比良坂八十八が、青藍を睨みつけている。青藍は人形のような表情で、まっすぐ比良坂八十八を見ている)

◇「それで、だ……玉世。お前の意図はなんだ？ この小説を雅庭会に提出した、お前自身の意図だ。

会に不満がある。それならいい。それは我々の悪しき点であり、解消すべき問題だ。それを伝えてくれ。分かるか、玉世……もし、さざなみが起きることを予期し、新参クイーンが批評のしようのないことを知り、それでいてなお、この作品を提出した、とするならば。

お前は意図を持たなければならぬ。正しい意図を。予期されるずれ、それを乗り越えるような意図だ。……もしそれが無ければ、お前は、知っていてもずれを引き起こした、唾棄すべき悪だということになる。

答えろ、玉世。……お前がこの小説を会に提出した、その意図は、なんだ」

(比良坂八十八が、静かに正面から青藍を見つめる。痛ような静寂の後、青藍は人形のような顔で告げた)

□「特に意図はありません」

× × ×

その瞬間であった。百七十六本の大剣が玉世の身体へと突き刺さり、黄金の光を放って次々に爆発した。

「滅キヤアアク！」

怒髪天そのものといった表情のコーネリアが叫ぶと、新たに三百五十二本の大剣が、空中に召喚される。次の瞬間、玉世の亡骸が縦にぱっくりと割れ、そこから少し小さなサイズの玉世が飛び出した。

「キヤラアッ！」

コーネリアが手を振るうと、新たな玉世へと、大剣が殺到する。玉世は人形的な表情のまま、すっと立ち上がると、大剣がその身に届く前に、レンガの壁をぶち破って外へ脱出した。

外は、白雪の吹きすさぶ雪原である。大穴の開いた壁からは吹雪が降り積もって、卓上にあるすべてのイカ料理が冷凍されていった。

「逃がすかア！」

コーネリアが床を踏み砕き、無数の大剣と共に外へ跳躍した。

薫が腹を抱えて爆笑している。

「いけませんわね、コーネリアは。玉世を殺すなら、一言言っただけでいいよ」

キヤロラインはそう言っただけで椅子から立ち上がると、ハイヒールをコツコツと鳴らしながら、大穴から外へ出ていった。

外の雪原。もはや雪よりも多く降りまくっている大剣を、人形的な表情の玉世が、なんでもなさそうに回避し続けている。

そのアイスダンスめいた様子を遠くから眺めると、キ

ヤロラインは好色な笑みを浮かべ、小さく舌なめずりをした。

そのままキヤロラインが手を前にかざすと、手のひらから青い炎が濁流のように溢れ出して、玉世とコーネリアを焼き尽くす。

一瞬で焼け野原と化した、まさにその場所で、黒焦げになった玉世の亡骸から、またもう少し小さな玉世が飛び出してくる。次は、少女ぐらいの身の丈だ。

ほぼ無傷のコーネリアは、舌打ちしながら甲冑についた煤を払って、逃げる玉世をまた追いかけていった。

キヤロラインも、そんな様子を見て愉しげに、ゆっくと雪原へ歩いていく。

部屋の中の円卓に残されたのは、ベルジャネーナ、テンメン、メアリー、グリユーネ、そして爆笑し続けている薫である。

ベルジャネーナは、

(なんじやこりや……?)

と考えて、げんなりと肩を落とした。

テンメンにいたっては、もはや目を丸くして、ポカンと惚けているしかなかった。

だが、メアリーは、

(なんか楽しそうなこと始まった！)

と考えて、亜空間からお気に入りの魔獣であるレッドベヒーモスとコカト・フェニックスを呼び出すと、巨大なレッドベヒーモスの背中にびよいと跨り、テーブルや床壁その他をめちゃめちゃにしながら、雪原へと駆け出していった。

木片が散らばった部屋の中で、グリユーネは立ちつくしながら、

(……もうこの場合は、玉世さんを一度殺した方が収まり

がつくでしょうか)

と考えて、獲物であるトンプソン・サブマシンガンで二丁取り出して腰ために抱えようと、メアリーの後を追うように雪原へと走っていく。

薫もけらけら笑いながら、外に歩いていった。

残されたのは、ベルジャネーナとテンメン、その二人である。

剣撃、爆炎、銃弾、咆哮。あらゆる音が、遠くから聞こえてくる。音が止まないあたり、未だ玉世は、逃げ続けているようだった。

冬山の廃屋のようになった部屋の中で、テンメンは立ったまま、おずおずとベルジャネーナに聞いた。

「……玉世さんは、あの小説で、いったい何がしたかったんでしょか？」

「知らね」

苦み走った顔で答えるベルジャネーナに、なおもテンメンは聞き続ける。

「じゃあ、結局なんでこうなったんでしょか……？」

「……それこそ分かるかよ。ただ、言えることは……」

ベルジャネーナは、そこで言葉を区切った。テンメンは、なにかを期待するように、顔を明るくする。

ベルジャネーナはそのまま、雪原を見て、言った。「あいつらが俺の想定を超えて、生き生きしすぎたってことだけだ」

それは、今しがた起きたあらゆる事象に対して、だいぶ前向きな捉え方をした発言だったが、テンメンの方はといえば、

(レベルじゃねーなって言わなかった……)
と、ちよつとしよんぼりしていたのだった。